

20122

胸腹部大動脈人工血管置換後に認めた fabric tear による仮性動脈瘤の治療に難渋した1例

【症例】57歳男性。18年前に胸腹部大動脈人工血管置換術を施行後。経過観察となっていた。フォローアップCTにて上腸間膜動脈再建血管の fabric tear による仮性瘤の増大を認め手術となった。**【手術】**追加の治療不可となることを考慮し事前に肋間動脈に対してコイル塞栓術を行った。後日、全身麻酔下に左鎖骨下動脈をカットダウン、ENDURANT Contralateral leg 16-16-93の先端チップを熱形成した後に挿入を試みるもリーク部の遠位の屈曲が強度のため通過できず。その後種々のワイヤー、シースを試み、最終的に6Fr ロングガイディングシースを用いて押し気味にゆっくりとENDURANT Contralateral leg 16-16-82を展開しプッシュインされる形で予定部位に留置し得た。手術時間は3時間12分。手術室抜管。**【術後経過】**術後早期のCTにてendoleakの残存を認めたが動脈瘤径の増大なく経過観察の方針とし術後15日目に退院となる。**【考察】**胸腹部大動脈瘤術後吻合部瘤などに対する外科手術は癒着剥離や肺損傷の危険などに難渋することが多く一方でステントグラフト内挿術では剥離操作や血管吻合が不要で体外循環も必要としないなどその有用性は高い。しかし人工血管置換後は正常の解剖とは異なりカテーテルの操作に難渋することもある。本症例においても侵襲は大きくなるが、開腹にて上腸間膜動脈よりプルスルーを用いてステントグラフトをガイディングするなど症例ごとの解剖を考慮した治療戦略を持ち合わせておくことが肝要である。